

塾長小泉信三が「出陣塾生」に贈った言葉

塾生出陣壮行会当日の塾長の訓示は記録が残っていない。しかし学生新聞『三田新聞』に小泉が寄せた次の一文と展示資料B・19に残された塾長訓示要旨のメモに共通する文言が少なくないことから、これに近い内容であったと推定される。

征け、諸君

塾長 小泉 信三

終に諸君の征く日が来た。今まで幾度となく私は諸君に向つて、此日の為めにといふ事を言つた。その日が終に来たのである。

今、別れに臨んで、特に新たに言ふべき事は何も無い。私は諸君を知つてゐるつもりである。諸君も亦た私の言はんと欲することを知つてゐるであらう。たゞ言ふ。『征け、諸君。君国の為めに。父母の墳墓の地を護らん為めに。』

学生入営の事が決定して以来、私は一方では、吾々に残された日の少なきを惜み、他方では、今日の来ることを日を数へて待つた。戦局は一日の坐視を許さない。国家の存亡といふが如きは決して濫りに口にすべき言葉ではないが、しかし、事実存亡の岐機は目前に在る。開戦以来、殊に昨年後半期以来の戦勢に依じて、様々なる職業、境遇、年齢の国民は、既に召されて前線に赴いた。

而して翻へつて我々の身辺を見れば、そこには心身浚刺として、純良誠実勇武果敢なる幾十万の学生がある。私は日々登塾して、朝夕塾生諸君の敬礼を受け、さうして遙に遠き東西南北の戦況の愈々重大深刻となり行くを想ひ、今は彼等の起つべき秋ではなからうかと、ひそかに心に問ふたことも幾度びなるを覚えない。而して遂に政府の一断となり、適齡学生者皆な筆を投じて一時に起つに至つたのである。思ふに、学生諸君の訓練を終へて前線に赴くは、恐らく凡そ今より一年の後であらう。既に学識あり、気力あり、体力あり、たゞ報国の一念の外、疑惧を知らず、顧念を知らず、固より恐怖の何たるを知らぬ幾十万の学生が、更に一年の猛訓練を受けて第一線に立つた其結果は果たして何であらうか。乞ふ姑らく待て。事実はやがてそれを示すであらう。而して其事実を、単に一個の報道としてでなく、痛刻酷烈慘澹たる体験として先づ身を以て知るものは、我同胞にはあらずして反つて米英幾十百万の将兵であらう。私は今心に其日の事を想ひ、指を屈して其日を待つてゐる。

殊に感ずべきは、出陣決定の後に於ける塾生諸君の態度であつた。諸君は、学生としての諸君に残されたる日々の過ぎ行くを惜みつゝ朝夕校門を潜り、入つて教室に師説を聴聞し、出でゝ校庭に朋友と談論笑話しつゝ、まことにやがて戦場に赴く身なることをも忘れたる

かの如き様であつた。これは深く心を定め、ひそかに期するところある人にして初めて能くするところである。諸君果たして如何なる修練によつて能くこの境地に達するを得たか。思ふに後世の史家の光輝ある大東亜戦争を叙するに方つては、学生皆な起つ今日の事を、必ず筆を新にして記すであらう。同時に、又慶應義塾史を編述する者は、必ず之に附け加へて、出陣学生等その入營の前日に至るまで、日々登塾、学問遊戯みな平日の如くであつたと、大なる誇りを以て記すであらう。

諸君在学の日に於て、私は屢々くり返して塾の徽章の光輝を説いた。国家の危急を前にして一学塾の榮辱の如きは論ずるに足らぬと謂ふかも知れぬ。しかし、小事は決して小事でない。父母を思ふこと篤き者は国を思ふこと篤き者である。母校を愛する人はまた国を愛する人である。諸君在学の日に於て、私は諸君を塾生として有することを慶應義塾の爲めに喜び且つ誇りとした。今同じ喜びと誇りとを以て諸君を護国の大任に送る。諸君も恐らく私の心を諒とするであらう。思郷の情は人の心を淨くする。諸君の出で、前線に在る日の夕べ、時に心に家郷を望むこともあるであらう。幸ひに其時、三田、四谷、日吉の丘と谷と樹木と家屋とをも思へ。さうして諸君の健康を我が健康と感じ、偏へに諸君の責務に忠ならんことを願ひ、常に諸君の武運の爲めに祈つて已まない者に、諸君の父母と姉妹との外に尚ほ一の慶應義塾のあることを記憶せよ。

名残りはいかに惜しんでも尽きないが、今は諸君と別れなければならぬ。幸ひに任務の重きを思つて自愛せよ。諸君が固より弾丸矢石を恐れる人々でないことは、私は十分知つてゐる。しかしそれと同時に、風土に心し、飲食を慎むことも亦報国の途なることを忘れてはならぬ。嘗て年少の友の出征に際し、私は書いて贈つたことがある。

大君の御爲めに敵弾を冒せ。

大君の御爲めに朝夕を厭へ。

今再び記して諸君の行を送る。